

5月初めに第9号を発行する予定でしたが5月に毎週活動が入り、1か月遅れの発行になってしまいました。感動した場面を思い起こしながら原稿をまとめました。

本号は4月から5月初めの活動を中心に報告いたします。

活動を通しての感想はボランティアの人数が徐々に少なくなっていることです。一方で復興の道のりはまだまだ遠く、孤独死やガレキ受け入れ反対運動などのニュースを見るにつけ被災地の皆様の心が折れてしまうのではないかと危惧します。

できることを多くの人に呼びかけて一つでも二つでもやり続けることが大切だと思う毎日です。

石巻市牡鹿地区復興応援ツアー実施

4月15日、経済的そして精神的にも被災地を応援しようという目的で「石巻市牡鹿地区復興応援ツアー」を実施しました。

ツアーの様子は地元下野新聞や読売新聞にも紹介されましたが、心寄り添う活動になったと思います。参加者はボランティア活動の一端を担った気持ちとなりとても満足したと感想を書いてくれました。

以前にいくつかの講演会に招かれてボランティア活動を紹介した際に「被災地に行って現地の皆様と交流し、最後に現地の仮設店舗で買い物する被災地応援ツアーを計画していますが、皆さん参加されますか」と聞いたところ、多くの方が参加したいと挙手してくれました。1万円の海の幸応援ファンドとセットで計画することで経済的にも精神的にも支援できる嬉しい企画になるだろうと意を強くしました。

地元新聞や市広報誌に1万円応援ファンドと一緒にツアーの紹介も掲載してもらいましたが、わずか2日ほどで定員34名が一杯になってしまうほどの反響でした。その後も倍以上の申し込みがありました。皆様の被災地支援の関心は薄れていないことを改めて感じました。

石巻市荻浜で1万円応援ファンドの代表者の一人である豊嶋区長さんの説明を聞き、わかめ作業を見学しながらの交流会後、鮎川地区仮設店舗で営業を始めた黄金寿司店の鯨の寿司入り昼食をいただき、現地の皆様との交流会、仮設店舗でのお買い物と計画に対し約1時間遅れるほどの充実振



往きのバス内で現地の様子を説明しました



被害の様子とファンドのお礼及び協力依頼を説明する豊嶋区長



ファンドのお礼と津波被害の様子を涙ながらに話す平塚さん



仮設店舗での買い物は経済支援に貢献

りでした。昼食時、被災者で1万円応援ファンドのもう一人の代表者である石巻市泊浜の平塚英徳さんにファンド協力のお礼と震災の辛さを涙ながらに紹介してもらった際、参加者も感極まり被災者の痛みを改めて感じる事ができた交流会でした。

帰路は紅白歌合戦で長渕剛が歌った門脇小学校や「がんばろう！石巻」の看板がある石巻市門脇地区に立ち寄り、被害者慰霊の灯火の前で合掌し帰ってきました。



被害者慰霊の灯火の前で合掌



参加者53名

ツアー参加者の感想を紹介します。「体を使うボランティア活動は難しいがこのような形で被災地のお手伝いができて嬉しい」、「被災地の皆様が明るく頑張っている姿が印象的だった。現地に来て被災の大きさを改めて感じた」、「同じ被災地でも市街地と郡部では復興の様子に差があり過ぎる気がする。国の支援のスピードが遅いことを改めて感じた」等々ですが、それぞれ現地を訪れて初めて気付く感想が多く、企画して良かったなと思うと同時に次の計画を立てねばと思う復興支援ツアーでした。

本ツアーは下記の下野新聞の動画サイトにも紹介されました。

<http://www.shimotsuke.co.jp/dosoon/town/nasukarasuyama/official/20120417/764103>

また、参加者の小室さんが自分のブログに詳しく紹介しています。

参考に関いて見てください。 <http://e-tochigi.com/blog/blog.php?key=30049>

<http://e-tochigi.com/blog/blog.php?key=30053>

海の幸1万円応援ファンドの海の幸が届き始めました

荻浜地区からわかめのめかぶと塩蔵わかめをセットにした海の幸が石巻市荻浜地区から届き出しました。実は、牡蠣が自慢の荻浜地区はファンド協力者に送る海の幸として牡蠣を考えていましたが2～3年掛かることから心を痛めていました。

荻浜地区で初めて養殖したわかめを食べさせてもらったところ感動的な美味しさだったので是非海の幸として送って欲しいと豊嶋区長さんに提案しましたが、わかめではファンドに協力してくれた皆様に申し訳ないからと乗り気でないのです。現地でのわかめの価値観は牡蠣養殖者にとっては牡蠣に付着する雑草のような存在ということで海の幸として考えていないのです。しかし、こんなに美味しいわかめをファンド協力者にいち早く食べて欲しいと思った私は一生懸命説明し了解してもらったのです。

このようにして届いたファンド協力者からは充分喜んでいただいた感想がたくさん送られてきました。一部を紹介します。

「こんなに早く海の幸が届くとは思っていなかったので嬉しかったです」、「手書きのめかぶの食べ方が添えてあり恐縮しました。食べてみて余りの美味しさにびっくりしました」、



今年度初めて挑戦したわかめ養殖の収穫作業に取り組む豊嶋区長

「送ってくれた豊嶋さんの住所が仮設住宅となっていて復興の遠さを感じました」等々です。ファンド協力者から直接、荻浜の豊嶋さんにお礼の電話や手紙が何通も届いていますという連絡を豊嶋さんからもらった時はとても温かな気持ちになりました。応援ファンドが心寄り添う活動になっていると強く実感した感想を送ってくれた方の文章の一部を紹介します。

一昨日朝、私のところに素敵な海の幸の小包が届きました。

石巻の方々ご丹精の「めかぶ」「塩蔵わかめ」です。ちょうど家人の居る早い時間に届き、その夜には新鮮な美味しいめかぶを頂きました。

こんなに美味しいめかぶを食べたことはなく、これが石巻の海の春の味覚かと思うと、これ一品でもたいへん立派な産物だと思いました。また、これらの漁と供給が長らく滞ってしまったことに、改めて震災・津波の猛威を感じるとともに、人間の営みのはかなさも感じられます。それでもマイナスの状態から少しずつ立ち上って行かれる一場面を見せて頂き、もったいないやら、美味しいやらで、生活を支えて下さる方々の存在が東京に居ながらにして感じることができます。

同封されていたお手紙も、一つ一つ書かれてお手間でしょうに、私達に漁をされる皆さん、加工される皆さんの姿を伝えて下さる貴重な手段だと、その伝達力を感じます。食卓にメモを置いて、家族の者と「美味しいね」といいながら、頂きました。家族は3人ですが、すごい勢いで食べて、新鮮なうちに全量いただいてしまいました。くせになってしまって、今夜からどうしようというところです。塩蔵わかめも、早速味噌汁にたっぷり入れて味わっていますが、厚み柔らかさと弾力のバランスのとれた、さぞやいい品なのでしょう。普段もスーパーのものは美味しく頂いていますが、これも癖になっては困るような美味しいものです。

漁の実情も知らずに、連絡が来ないことを心配したり、恥ずかしい御連絡も差し上げましたので、嬉しい御連絡も差し上げねばならないとガンバッテ写真を撮ったものの、メールを差し上げるのが遅くなってしまいました。もしも週末に関係者の方に会われることでもあれば、東京の1ファンが非常に感動していたと、お伝え下さい。



海の幸応援ファンドは協力者175名約206万円で第1陣として終了させていただきましたが、金額の大小の問題よりもどれだけ現地の皆様の前向きな気持ちを支えることができたかが私たち龍 JIN のものさしであると話し合っています。

協力していただいた皆様に感謝いたします。石巻市泊浜地区からも時間はかかりますが海の幸が届きます。楽しみにしててください。

地元栃木放送で野球部主将渡邊君(小6年)の作文が放送されました

前号で紹介した烏山野球クラブキャプテン渡邊寛之君(当時小5年)の「石巻に行って」の感想文を小堀夢新聞と一緒に前栃木放送社長に紹介したところ栃木県内に放送しようと即決してくれました。栃木放送の女性スタッフとの事前打ち合わせの時に「この作文を渡邊君本人は泣かずに読めますか？」と涙ぐみながら私に質問されました。なんて素晴らしい質問なんだろうと感動してしまいました。私も何度読んでも涙が出てしまいます。

栃木放送スタジオに私と一緒に行き取材形式で録音取りしました。渡邊君は素直に感じたことを丁寧に答えていました。アナンサーとの遣り取りを聞いていて改めて彼の人を思

いやる優しさを感じました。

被災地に行って心温まる交流活動をした経験が子供をこんなにも大きく成長させるのだと彼の作文朗読を聞きながら改めて感じました。人材育成の教育プログラムにこのような交流活動を組み入れるべきだと強く思いました。同時に子供たちを連れて行こうとした際に一部の親も学校も消極的だったことを思い出し、今の教育の問題点も思い知らされました。何かあったらどうするのか、責任は誰が取るのか等、当然考えなければならないにしてもマイナス志向に陥り、何もやらないことがベターという選択枝になってしまうことが多いのが現実です。実施することを前提にどうすればできるか、どうすればリスクを抑えられるかとプラス志向で考えるとどんどんアイデアが浮かんでくるのも事実です。

最初にプラス志向で考えるように仕向けるリーダーシップが大切だと思うこととそのような人材を育てることが今の日本に最も求められていると思うのです。

無事に録音取りを終えて渡邊君は「何回も読み返す練習をしながらドギドギする毎日だったが、やっとすっきりしました」と笑顔で話してくれました。



栃木放送スタジオで録音している様子



渡邊君が読んだ感想文の光景、冷たい風が絶えず吹いていました

地元烏山に帰る車の中で被災地の子供たちと野球をする計画を考えていると話したところ「僕たちが被災地の皆んなを元気にしてあげられることは全力で投げ、打ち、走るところを見てもらうことだと思うし、是非見て欲しい」と話す渡邊君を見てさらに清々しい気持ちになりました。

次号のお知らせ

5月12日～13日荻浜に1泊2日でわかめや牡蠣養殖作業の活動をしてきたこと、5月20日には市内岩子仮設住宅で「入居1周年のつどい」のお手伝い、そして5月26日には宮城県七ヶ浜町農地復活大作戦のバスボランティア活動に高校生32人を含む53名で行ってきました。

これらの活動を中心に現地の皆様との交流の様子やボランティア活動の動向などを報告する予定です。

被災地の皆様は何年も今の生活が続くものと思います。全国の皆様の目と心を彼らに向けるにはどうすれば良いか、さらには風化させないためにもどうすれば良いかを考えながら活動を進めていくつもりです。変わらぬ応援をよろしくお願いいたします。

参考に平成24年4月18日下野新聞復興応援ツアーの記事を次頁に掲載します。

県北・日光版

287(80)1023
AX(80)1024

経済支援へ思い共有

34人、仮設店舗で買い物

石巻応援ツアールポ

【那須烏山市災害ボランティアチーム龍丁INの「宮城県石巻市牡鹿地区復興応援ツアー」が15日実施された。同チームは被災地で炊きたしや交流会を通して支援してきたが、一般参加者を募っての経済支援ツアーは初。市内外から34人が参加し、1口1万円の支援の礼に5千円分の魚の幸が送られてくる「海の幸応援ファンド」の支援先を訪ねた。漁師と話したり、仮設店舗で海産物を買うなどし、応援の思いを共有した。

(小林治郎)

心つなごう

東日本大震災

市内を午前6時半に出発したバスは道中、同チームの小堀道和代表(63)が活動内容を

市内を午前6時半に出発したバスは道中、同チームの小堀道和代表(63)が活動内容を

に再建したいと考えて、豊嶋祐二区長(59)は「ワカメをやって頑張っている。早く高台移転し、市街地の仮設住宅にいる息子らが住めるようにしたい」と説明した。

昼食は、鮎川小学校仮設住宅の古内勝治区長(68)が鮎川地区の仮設共同店舗「おしかのれん街」で再開したすし店のすしを、同住宅の集会所で食べた。その際、支援先の一つである泊浜の漁師、

平塚英徳さん(65)がお礼に顔を出した。

「漁を復活させて、恩返ししたい」とあいさつ。ただ津波の話を質問されると、「息子がこの浜で漁がしたいと言うので、街に移らず、家を建てたが、8カ月で流された。船の道具もほとんどない。支援のおかげで、少しずつ道具を用意している。涙が出てきて話ができないが、頑張ります」と言葉を詰まらせた。その姿に、参加者も涙ぐんでいた。

その後、一行は仮設共同店舗に行き、古内区長に声をかけたり、



他の店で海産物を購入し、帰路についた。途中、石巻港の近くの地区を通った。がれ

被災でワカメの加工作業を見学する参加者

きや車の巨大な山、黒く焼け焦げた学校。：。あらためて津波被害の大きさを実感した。

参加した元校長の高野博さん(70)は「体を使う支援は難しいが、今回のようなことで役に立てたら、焼けた学校には涙が出た」。車中でファンドに申し込んだ柳田京子さん(72)は「これまでの苦勞を察し、少しでも元気になれる手伝いをしたい」と話していた。